

B 2 幼児の思いやり行動項目妥当性調査について
大妻女子大学人間生活学研究所員 ○長山篤子
大妻女子大学 平井信義 千羽喜代子

目的 平井信義の「人格構造とその発達過程」を追求するなかで、われわれは、幼児の思いやり行動に注目し、その精神構造と発達過程を明らかにする研究を始めた。まず文献研究と幼児の行動観察から思いやりを以下のように定義した。思いやりは、日本独特の表現であり、情緒的基盤に成り立っていることを考慮し、Rogers, C. R. の empathy (共感) の定義に基づき「相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む心」とし、その行動は「それとなく表れる行動」であるとした。以上の定義に基づき3名の幼児をそれぞれ3年間、追跡的に観察することにより思いやり行動を抽出し、研究グループによって大項目10と50小項目に整理し、幼児の思いやり行動項目として設定した。今回の研究の目的はわれわれが設定した幼児の思いやり行動項目の妥当性を確かめるところにある。

方法 われわれの作成した幼児の思いやり行動項目の妥当性を確かめるために、幼稚園11園に於て、アトランダムに選択した5才児63名の幼児を、各幼児につきそれぞれ2名の観察者が、チェックリスト法により、思いやり行動を2段階の選択肢でチェックした。その結果から行動項目間の客観性、信頼性、感受性を調査し、各項目の妥当性を確かめた。更に各行動項目間の相関関係を算出し、各項目の検証を行った。

結果 これまで設定してきた思いやり行動項目50の小項目のうち、信頼性については21、客観性については4、感受性については1の各項目に問題のあることが判明した。

各項目の検証についてはそれぞれ独立した項目として設定できることを確認した。